

[実践報告]

アート・カンテラづくりワークショップの実践

—使用済み一斗缶のカンテラへの利活用の事例—

新井義史

北海道教育大学釧路校美術教育講座

Practice of Art Lantern-making workshop: Case with profit use to lantern of used Ittocan

Yoshilumi ARAI

Department of Art and Craft Education, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

1 はじめに

本稿では、学生と地域住民によるカンテラ制作ワークショップの事例を報告する。

今回の企画は、地域振興事業に取り組む地元団体から依頼を受けた筆者が仲介者となり、生涯教育課程造形文化領域の学生がボランティアとして造形ワークショップの指導をおこなったものである。

「カンテラ」とは、一般的には石油ランプの普及に先立ち用いられた灯火具のことをいう。ランプの普及後はもっぱら携行用灯火として角型でレンズ付きの形態のものをさすようになった。風除けのために枠張りした紙に囲まれた「行燈（あんどん）」や、折りたたみ式でロウソクを用いる「ランタン」とも類似している。

今回ワークショップで作成したものは、ロウソクを用いて床に設置する形態であるので、正確にはランタンや行

燈に近いのであるが、ここでは依頼者側が名づけた「カンテラ」という用語を用いた。

ロウソクやカラー電飾を用いて夜のイベントを飾る催しは全国で行われている。最近では神戸ルミナリオのような大規模なものをはじめ、クリスマス時期にはツリーや樹木を彩るイルミネーションが各所で見られるようになった。あるいは上川郡下川町の例が示すように、氷でつくったランプシェードにロウソクを灯す「アイスキャンドル」が、新たなタイプの催しを形づくるなど、「光」を活用した試みは多様な展開を見せている。

今回のワークショップの特徴は、以下のような点にあると考える。

- ①資源の利活用的視点を持つ造形活動
- ②子どもにも可能な材料や方法の研究
- ③地域住民にイベントへの新たな関わり方を促す
- ④造形活動を通じた住民と学生との触れ合い

カンテラで会場入り口 照らそう！ 阿寒ほろろん祭り

会場入り口を照らそうという試み、阿寒らしいイベントを目指して今年新たに企画したもので、100個のカンテラを展示することを計画している。

1日体験工房では、道教大釧路校美術学科の学生たちが、分かりやすくカンテラづくりを指導。参加者それぞれに個性あふれるカンテラを制作してもらう。

体験工房は22日午前10時と午後1時30分から合わせて2回行う。小学生以上が対象で、参加料は500円。実行委では「カンテラづくりを親子で楽しんで」と呼び掛けている。問い合わせは公民館、

22 日 に
1日体験工房

「阿寒」27、28の両日開かれる「阿寒ほろろん祭り2004」で、「一斗缶を使ったカンテラ」写真展を展示する「アート・フェスタ」。まつりを主催する実行委は22日、カンテラづくり体験を町公民館で行う。

アートフェスタは「一斗缶に穴を開けて阿寒の動植物を描く「ア・缶テラ」で会場

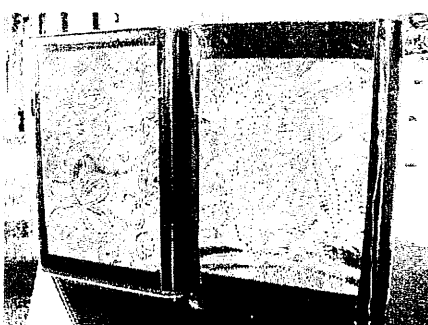


図1 参加者募集記事（釧路新聞）

2 企画の背景と経緯

(1) 「阿寒ほろろん祭り」への追加企画として

「阿寒ほろろん祭り」は、阿寒町の「阿寒ほろろん音頭」をアレンジした曲で踊る、阿寒独自の音楽と踊りの祭典として1996年に開始された。その後、次第に規模を拡大し、道内外から3000名以上の踊り子が参加する大イベントとなった。

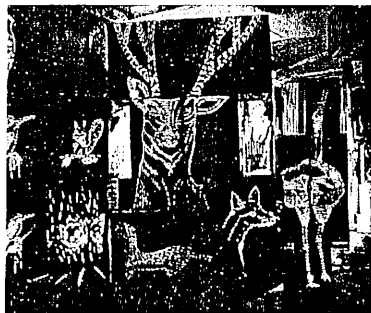
あらたな「特産品づくり」「祭り開催」など、地域振興事業の一環として各地で行われてきた催しの中でも、「阿寒ほろろん祭り」は成功した例の一つだろう。

今回の造形ワークショップは、この祭りの企画内容の一部として、さらに夜の会場のエントランス部分を照らすオーナメントづくりとして学生への協力を依頼されたものである。

これまで、祭りそのものは規模も拡大し順調に展開してきた。しかし、この祭りが「踊る人」と「見る人」とに二極分化してきたことから、あらたに造形活動を加えることで、地域住民の参加意識を促したいというのが、主催する実行委員会側の考えであった。

(2) 一斗缶カンテラ作りのきっかけ

一斗缶カンテラづくりの元々のアイデアは、標茶在住の吉村氏の「缶(キャン)ドルアート」にある(図2参照)。



吉村さんが制作した森の動物たち

「標茶」一斗缶に穴をで照らすフクロウなどの北よりの風(標茶町)の缶(キャン)ドルアート
 吉村さんは、1999年からフクロウなどの制作を始め、その後、立体的な大きな動物を「一斗缶」を使い、魚を捕獲するフクロウや、「タンチョウ」「シカ」などを制作。
 今回の作品は、今年2

吉村さん

森の動物を見事に表現

北よりの風 缶ドルアート制作

「標茶」一斗缶に穴をで照らすフクロウなどの北よりの風(標茶町)の缶(キャン)ドルアート
 吉村さんは、1999年からフクロウなどの制作を始め、その後、立体的な大きな動物を「一斗缶」を使い、魚を捕獲するフクロウや、「タンチョウ」「シカ」などを制作。
 今回の作品は、今年2

月に釧路市後前庭で開かれたイベント「夏あかりの森」に出したのがきっかけで、ほかの動物も作ると計画。巢穴から顔を出すモモンガや子供を加えたキツネツネなど、森の動物たちを見事に表現している。これらの缶ドルアートは、管理さえしなれば、気軽にイベントなどに無償で貸し出ししている。問い合わせは、北よりの風0154-601-2000へ。(黒田文彦)

図2 釧路新聞 H16.6.17

これらの作品を目にした実行委員が、吉村氏に会い、材料から制作方法にいたるまでよく承知していた。一斗缶はスチール製で耐熱性であることからカンテラとしての利用が可能である。阿寒湖畔のホテルでは加熱用パラフィンの運搬保管用として、日頃から大量に廃棄物となっていた。

一斗缶カンテラ作りは、廃物の利活用という視点および夜の祭り会場を照らすオーナメント(装飾)の実用性という面からも適当であろうことから、ワークショップとしての実現を検討することにした。また、この企画には「阿寒」をもちり、「ア・缶テラー日体験工房」という名称が付けられた。

当初、実行委員会側からは、凧づくりをはじめとする数種のプランが提案されたが、筆者と検討した結果、この「カンテラづくり」と「リサイクル・アート」の2種のみを実行可能と判断した(「リサイクル・アート」に関しては、作品募集を行ったものの応募者はいなかった)。

(3) 学生への制作指導依頼

造形ワークショップの実施にはさまざまな材料用具の工夫ならびに準備が必要である。また、当日の制作指導や作業補助に介助者が必要とされる。実行委員会は、それら実務補助を町内の文化協会に依頼したものの高齢化を理由に断られたとのことであった。もともと、ワークショップの主要な参加者として小中学生を想定していたということもあり、筆者を通じて教育大学生に依頼されたわけである。

最低4名程度の学生を予想して掲示による募集を行った結果、7名の学生からの申し込みがあった。学生指導に際しては、できるだけ学生たちの自主的な活動を尊重することを基本に置き、リーダーと役割分担を決定した後で、カンテラ作りの材料や作成方法については、学生たち自身で検討させることとした。

ただし、いわゆるワークショップ的な活動を体験している学生は含まれていない。したがって、それに必要な部分については筆者が随所にアドバイスを加える形で実施した。

3 実施内容

(1) 企画概要

- ①阿寒町住民を対象とした、一斗缶を用いたアート・カンテラ制作ワークショップ
- ②参加学生によるアート・カンテラ共同制作
- ③「阿寒ほろろん祭り2004」期間中(8月27・28日)の点灯展示

- (2) 主催：阿寒ほろろん祭り実行委員会（窓口：阿寒町役場まちづくり推進課）
制作指導協力：北海道教育大学生涯教育課程造形文化領域学生
- (3) ワークショップ期日：2004年8月22日（準備期間：7月27日～8月21日）
- (4) 会場：阿寒町公民館、視聴覚教室
- (5) 参加者 本学学生7名、地域住民約40名
- (6) おもな使用材料
使用済み一斗缶 110 個、太キャンドル 100 個、0.1ミリの市販アルミプレート、コルクボード（掲示板用）30枚、アルミ粘着シート（水道工用）25M×3本、五寸釘、

4 経過

(1) 準備段階

準備段階の作業には（A）カンテラ制作方法の検討と（B）学生作品制作との2種類がある。7月27日と8月2日には、学生全員が参加して、両日とも約四時間程度を使って試作材料の購入や試行を行った。なお、本稿では、住民とのワークショップを中心に報告することが目的であることから、（B）学生作品制作に関しては省略した。

(A) カンテラ制作方法の検討

7月21～27日：参加学生の募集

7月27日：打合せ① 概要把握、役割分担、制作方法・材料用具の検討

8月2日：打合せ② 試作を持ち寄り検討し、制作方法を確定

8月10日：住民参加人数の確定、材料購入着手

(B) 学生作品制作

8月10日：打合せ③ 学生作品に関する検討

8月13～17日：学生作品作成

①子どもにも制作可能な「素材」と「方法」の変更

吉村氏は、一斗缶に砂を詰め込み、五寸釘をトンカチで叩き穴を開ける方法を用いていた。そこで同様の方法を試してみたのであるが、スチール製の一斗缶は薄いものとはいえ、穴を開けるには相当な力が必要で、子どもの力では困難なことがわかった。また、叩く際に大きな音が出るため、室内で多人数が作業するには不適當である。したがって、穴開けしやすい別な不燃性の材料を種々検討した。その結果、一斗缶はフレームとしてのみ使用し、図柄を開ける部分の素材には、厚さ0.1ミリの市販アルミプレートを使用することが最も望ましいと考えた。

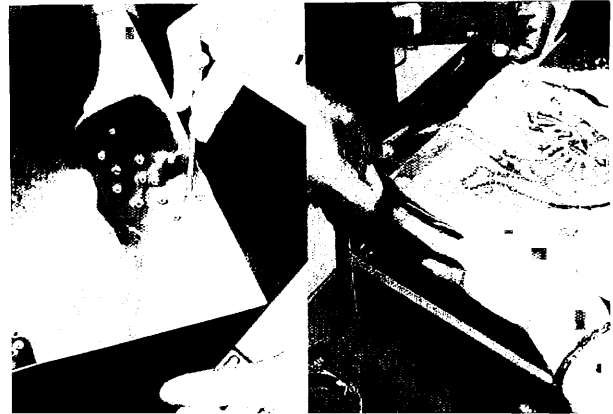


図3 薄手のアルミ板に図柄を穴開けし、一斗缶に貼り付ける方法に変更した。

②怪我しないための「安全な方法」の検討

0.1ミリのアルミ板は、子どもでも強めに釘を押し付けることで穴が開く。また、トンカチを使うと、大・小の穴の大きさを加減することが可能であり、今回の作業に適した素材であることが分かった。ただし、アルミとはいえ金属板である。うかつにエッジ部分に触れると簡単に指が傷つく。安全面での配慮と穴開けの際の下支えを兼ね、あらかじめアルミ板をコルク板にテープ止めしてから参加者に渡すこととした。

③一斗缶のくり抜き作業

一斗缶の、アルミ板を貼り付ける部分をジグソーで切り取ることは実に大変な作業である。当初は大学へ運搬し学生がくり抜くことになっていた。しかし、運搬作業自体にも多大な労力を要することから、実行委員会の方で対応してもらった。

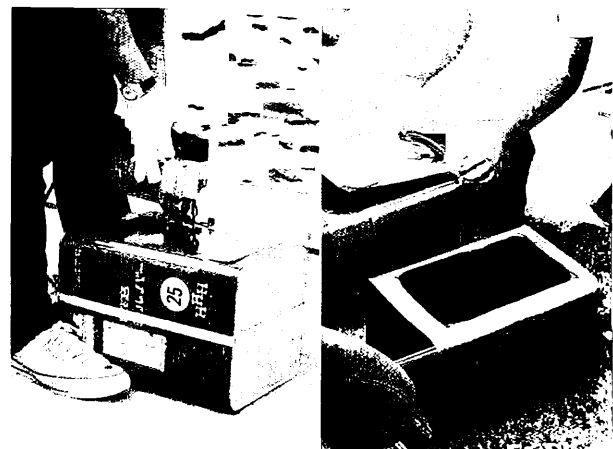


図4 ジグソーを使い一斗缶を四角くり抜く。大きな騒音が出るうえに、曲線切りの際にブレード（刃）が折れるなど、いろいろと苦労させられた。

④下絵の準備

通常、このような作品制作のワークショップに参加する方々に問題になることは、適当な図柄を自分で用意できないということである。そこで、今回はマイクロソフト社のOffice Web ホームページから、著作権フリーのクリップアートをダウンロードし、プリントアウトした。動物や植物など、今回の企画内容に適した図柄を約80枚準備した。

⑤説明プリントの作成

参加者に一連の作業内容と手順を理解させるための説明プリントは筆者が準備した。これを用いて、学生の代表者ができるだけ平易に説明することにした。

カンテラを作ろう

■使うもの (材料・用具)

一年缶 (図柄燃料が入っているもの)
アルミ板 (101×20×300mm) フルク長
カーボン紙 (粘着型)・ボールペン
1斗缶
アルミ粘着テープ
筆



① 下絵をうつす

ボールペンで定規を使って下絵をうつす



下絵
カーボン紙
アルミ板

よく見てください
アルミ板へ入念にうつします。

② 穴をあける

クシの裏で穴をあけます



穴の大きさを工夫しよう

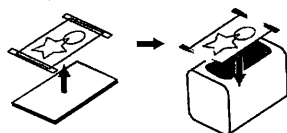
- クシの裏を用いると軽く打て、強めに打てない
- トンカチで、ワザがなくてくしの裏に穴をあけるとトンカチが折れやすい

③ 一斗缶にはりつける

アルミ板をはずし、粘着テープで固定するのがよいです。

1. アルミ板をはがす

2. 一斗缶にはる



よく見てください 夏手着用
アルミ板は指が切れます
アルミ板の時は指を切らないで!

- できあがった2人ではいけません
- ほしは、上下をはさむのがよいです

完成 ロウソクを入れてみよう

思い切って、ロウソクを入れて、火をつけてみよう

よく見てください 夏手着用
アルミ板の穴から煙がでる時は、「おろし器」といいます。

図5 配布プリント

⑥その他の準備

上記までの事前準備に加えて、ワークショップ当日に、参加者が集まる前の約1時間で行った準備作業としては以下のようなものがあった。

- ①アルミシートのカッティング
- ②アルミシートのコルク板への貼り付け
- ③アルミ粘着シートのカッティング



図6 当日開始前の諸準備。これらの作業は本来は事前に済ませておくべきもののだが、材料が揃わなかったことから慌ただしい当日の作業になったものである。

(2) ワークショップ当日

約40名の参加者は、大別すると小中学生、青年、年配者の3タイプに分けられる。そのうち20歳代の約10名の青年は、日頃から街づくりに関心をもち活動を行っているメンバーであり、今回の企画には「動員」されたかたちであった。小中学生の多くは年配者とともに参加しており、自主的な意思で参加してきたようである。



図7 開始時の紹介(上)と、作業内容の説明(下)



図8 カーボン紙をはさみ下絵転写する。



図9 穴開け：一時間程度で完了する



図10 動員された青年グループ。多い人は、ひとり4点を作成した。



図11 穴開けが終わり、一斗缶にアルミ粘着テープで貼り付ける。



図12 廊下の暗がり、ロウソクの灯をともし



図13 予想以上に美しく見える。一作目の出来映えに感激し、多くの参加者が2点作成した。



図14 完成した作品。午前・午後の部をあわせ、約80個ができた。

5 学生たちの感想

(A) 4年生 参加者は親子やお年寄り、高校生といった幅の広い年齢層の人々でした。教育実習の際に体験したやる気のない生徒達と較べると、意欲をもって参加されており、私たちが教えてもらうことの方が多かったように思います。道具の指導に関しても、子どもの隣には必ず保護者がいたので、私たちが口を出すまでもなかったと思いました。全体を通して、私たちが指導側に立っての参加よりも、一緒に制作に参加したいと思えるような、和気藹々とした雰囲気の良いものだったと思います。

(B) 4年生 はじめて取り組む内容のため、思いどおりにならない点も多く大変だった。ワークショップ当日の参加者の皆さんが制作している様子から感じたことは、皆さん制作するほど缶テラにのめりこんでいった様子でした。制作が簡単で分かりやすいといった点が良かったと思います。楽しみながら制作する皆さんの様子を見て、私たち自身の制作について考えさせられもしました。学生同士の作業の連携については、2年生が中心となりしっかりと行動してくれた点が良かったと思う。学生作品についてはもっとしっかりと制作すべきだったと、町民の参加者の方々の優れた作品をみて反省しています。

(C) 2年生 このような形でお手伝いをするのは初めての経験だった。年齢層は小学生から年配の方々までさまざまだった。自分がいくら作業工程を理解していても、人に説明するとなると緊張した。あらためて人に説明することの難しさを感じた。参加者の方々と会話もでき、とても楽しく作業ができた。またこのような機会があったら参加してみたい。

(D) 2年生 事前の注意点の説明などが参加者に明確に伝わっていたと思う。参加した皆さんが初めての作業だというのに、驚くほど手馴れた感じでとても上手に作品をつくっていたことに驚いた。多くの知らない人とこのような機会を知り合えるのはひじょうに良い経験となった。

6 おわりに

当初目標は100個のカンテラを作成することであり、この目標は達成された。約40名の町民の手によって作成されたアート・カンテラは、図14の写真のように、集合させると相当美しい展示物になった。ただし、その後の「阿寒ほろろん祭り」期間中の展示では、会場の周囲が明るすぎたことから、本来めざしていた展示効果を発揮させるには至らなかった。展示方法に関しては今後十分に検討する必要がある。

地域の活性化に関しては、全国各地でいろいろな試みが行われてきた、今回実施したワークショップも地域づくりの一環に位置づけられる。だが、地域の資源を生かした特産品づくりやイベント開催などに比べ、造形ワークショップはまだまだ珍しい活動であろう。今回の企画に関しても、地元住民の参加者の多くは、「何が行われるのか」明確な自覚なしに参加していたようである。ふだん造形活動に無縁な人々の方が圧倒的に多いのであるから、ワークショップの内容は、参加者の興味関心や表現レベルをよく理解した上で組まれる必要がある。

また、住民参加型の「造形ワークショップ」では、純粋に造形作品を制作するという活動だけでは、参加者の理解を得にくいことが予想される。

今回のカンテラづくりの活動は、使用材料の面から、資源の利活用という観点が見えやすい形であった。使い捨てによる資源の無駄遣いに目を向けるという観点があったことも企画の重要な要素であったろうと考える。